

豊明希望チャペル礼拝

2026/10/4

「主イエスの恵みによって救われる」

使徒 15 : 1～21



これは、ガリラヤのカペナウムにある、ユダヤ人の集会所、いわゆるシナゴグと言われる、その跡です。

使徒の働きから教えられています。パウロらが、アンテオケ教会から、異邦人伝道に遣わされて、最初の伝道旅行（第一回伝道旅行）を終えて、エルサレムに行って、伝道旅行の報告、証しをする場面であります。そして、それと同時に、異邦人伝道の

あり方について、あらためて会議が持たれました。歴史的にも、紀元 48 年から 50 年と年代が特定されている**第一回エルサレム会議**と名がつけられた有名な場面があります。ちなみに、その際、どこが会場になったのか書いてないわけですが、この時期はまだ、ユダヤ人が聖書を広げて学ぶ集会所であったのかもしれませんが。

パウロらが、伝道旅行の最初に陸の上陸した時に、こうありました。キプロス島に渡ったときにはこうあります。

「13:4 二人は聖霊によって送り出され、セレウキアに下り、そこからキプロスに向けて船出し、13:5 サラミスに着くとユダヤ人の諸会堂で神のことは宣べ伝えた。彼らはヨハネも助手として連れていた。」

ユダヤ人の諸会堂で語ったとあります。それが、最初にお見せした、いわゆるシナゴグのことです。小アジアのペルゲに渡ったときにもこうあります。

「13:14 二人はペルゲから進んで、ピシディアのアンティオキアにやって来た。そして、安息日に会堂に入って席に着いた。」

この「会堂」とは、ユダヤ教のいわゆるシナゴグのことです。福音書でも、イエス様が、聖書を渡されて聖書からお話になる場面がありますが、そんなユダヤ人の集まる集会所、あるいは礼拝所です。



最初の頃、会堂には、ユダヤ人もいれば、クリスチャンもいるという状況があったと思われます。今日の箇所の**エルサレム会議**は、さすがに、クリスチャンだけの会議であったと思いますが、当時はまだ、一般のユダヤ人からすると、クリスチャンも、ユダヤ教の一派という程に考えていたのかもしれませんが。ですから、シナゴグにも出入り自由であった、そんな立場だったの

ではないでしょうか。今日の箇所で、

「15:5 ところが、**パリサイ派の者で信者になった人たちが立ち上がり、「異邦人にも割礼を受けさせ、モーセの律法を守るように命じるべきである」と言った。**」とあります。パリサイ派の者でクリスチャンになった者が、そう主張したというわけです。異邦人が救われるのはいいが、割礼を条件とせよというわけですね。ちなみに、ここまでの箇所では、私は、心を打たれる場面があります。この 4 節までのところを読みますが。

「15:1 さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに「モーセの慣習にしたがって割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教えていた。15:2 それで、パウロやバルナバと彼らの間に激しい対立と論争が生じたので、パウロとバルナバ、そのほかの何人かが、この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった。15:3 こうして彼らは教会の人々に送り出され、**フェニキアとサマリアを通過して行った。道々、異邦人の回心について詳しく伝えたので、すべての兄弟たちに大きな喜びをもたらした。**15:4 エルサレムに着くと、彼らは教会の人々と使徒たちと長老たちに迎えられた。それで、神が彼らとともにいて行われたことをすべて報告した。」

心を打たれるというのは、5 節までの黄色くマーカーを付けた箇所です。

パリサイ派の者で信者になった者たち。え、あれほど、イエスに敵対し、なんなら、イエスを十字架につけた当事者である聖書の学者たちが、しれっと、クリスチャンになっている！しかも「たち」と複数いるということでもあります。

また、パウロらが、アンテオケ教会から、この件で、エルサレムに向かうとき、フェニキアとサマリアを通過して、異邦人がクリスチャンになったことを伝えて、彼らに大きな喜びをもたらしたというのです。ルカは、そのことを、ここもわりとしれっと、その彼らとは、フェニキア・・・これ、海沿いの異邦人ですし、サマリア・・・これ、イスラエルと対立している人たち、彼らがクリスチャンとなっていて、彼らも喜んだというわけです。

いやいや、教会には、すでに、フェニキア人もいれば、サマリア人もいれば、パリサイ派もいる・・・もちろん、異邦人も救われて加わっている。えらい、国際的な教会にすでになっているじゃんという驚きと、そのことが、ルカによって自然に報告されていること、すでに、異邦人が教会の兄弟姉妹の仲間の一部、一人として、当然のように迎えられていることに驚きを感じるということでもあります。

今日の箇所では、長い箇所でしたが、すでに理解していただいたと思いますが、旧約聖書以来の、ユダヤ人のアイデンティティーともいうべき、ユダヤ人なら、生まれたときに、男は割礼を受け、ユダヤ人の印とする、異邦人でユダヤ教となった者の場合も、大人になっていたとしても最低限、割礼だけは受けてもらうことは、ゆずれないきまりでした。それが、この会議で、結論を言えば、異邦人は、受けなくて良いと言う事になったのです。さらには、これからクリスチャンになる人は、異邦人であろうとユダヤ人であろうと、不要ということになった、そういう会議で、これ以降、もはや、クリスチャンが、ユダヤ教の一派と見ならされなくなった会議

とも言われ、ひいては、だからこそ、ネロの迫害の時に、ユダヤ人までローマの大火の責任を担わすと社会的影響が大きい、都合のいいことに、クリスチャンは、ユダヤ人の一派とみなされなくなっているから、少数派で、ちょうど適当な、スケープゴートだと、目を付けられたんだとも言われるのですが、先に、この頃までは、シナゴグにも出入り自由であったかともいうような事を言いましたが、ここからは、それもゆるされなくなる、そのくらい明確に、キリストの教会は、その独自性を確立させていった、そういう会議となったと言うことです。

そして、その、あらたに始まったキリスト教会の独自性の中心に、割礼を受けなくてもクリスチャンになれるということがあったということであり、もう少し、その当時の人々の心境に寄り添うように言えば、ユダヤ人は、自分の民族がこだわって来たものを捨てた、あるいは譲ったということがあるということです。それは、フェニキア人、サマリア人、小アジア、ローマの異邦人も、そうした民族的な確信、こだわってきたものがあつたはずですが、お互いに、教えの中心的なこと以外は、捨てて、譲って、一つの教会になったと言うことであります。

そして、その教えの中心とは、たとえば、この御言葉です。

「15:11 私たちは、主イエスの恵みによって救われると信じていますが、あの人たちも同じなのです。」

開きませんが、パウロらの小アジアでの伝道旅行の報告がなされ、パウロらが、異邦人に、割礼無しに、クリスチャンとなったことを受け入れていることに、クリスチャンでも、ユダヤ人として生まれたクリスチャンが、反対したことが、そもそもの、この会議のきっかけの一つでしたが、割礼を受けなくても、民族を超えて、キリスト教会に受け入れていいかという課題がもめたとき、ペテロがたって、会議の結論的な一言を発言した、その内容です。このあと、教会は、反対意見がなくなります。

「15:12 すると、全会衆は静かになった。そして、バルナバとパウロが、神が彼らを通して異邦人の間で行われたしるしと不思議について話すのに、耳を傾けた。」

全会衆は、もう反対意見がなくなったということです。大拍手ですね。これが教会ですね。私は、このエルサレム会議が、最初から対立がなく、なに、偏見に満ちたことを言うのか、クリスチャンらしくないと、最初から、クリスチャンでも割礼を受けるべきだという考えを、否定しなかった、少なくとも、一度話し合ってから、

決めようと考えて、まずは、集まって、反対であつても賛成であつても、意見を出し合ったことに、これぞ教会！と、ここにも心打たれるのです。

今、JECA 中部地区牧師会では、約 20 人の牧師のうち、



そのうちの3人が韓国人の牧師です。育った背景が違いますから、韓国的な感覚と日本的な感覚が、ないと思っていたのですが、案外あるなと気づくことがあります。例えば、韓国の牧師から、これは、日本の教会でも必ず喜んでもらえるはずだと思って、提案していただくことがあります。その時、時に、日本の牧師は（その中の一人が他でもない私ですが・・・）、たとえば、その提案の出所や、予算の分類やら、問題が仮に起きた場合の責任のあり方やら、とにかく、日本人は、段取りや、根拠などにうるさいのです。それは、韓国の牧師からすれば、は？という感じだと思います。日本の牧師も悪意はないのですが、細かいのです。会議は時間がかかります。最終的には理解し合えるのです。全牧師会は静かになった・・・となるのです。もちろん、この教会もそうですし、他の教会もそうでしょう。議論やら、時に対立もあります。しかし、キリスト教会が、神さまによって、イエス様によって、もっとも大切に教えられていることは何なのでしょう。それは、一つになる根拠があると言うことであります。それは。

「15:11 私たちは、主イエスの恵みによって救われると信じていますが、あの人たちも同じなのです。」

ユダヤ人も、割礼は、私が神の民とされていることの、それは印であって、誇りであります。異邦人もこの、神の民の誇りを持てるんです、この印を体に刻んでいいのです。なぜ、拒否するのですか？割礼、素晴らしいでしょ。こっちは、あなたも受けて良いと言ってんですよ！という（愛？の）思いはあるのではないのでしょうか。

わかりませんが、ギリシャ系のフェニキアは、ギリシャのソクラテスやプラトンという哲学者の国ですから、ちょっと日本人に似てたかなあ・・・いや、長野県人みたいに、何でもとにかく、一言意見を言いたい、議論をふっかけてくる、理屈っぽい人たちだったかも知れません。このあと、最低限、**「15:20 ただ、偶像に供えて汚れたものと、淫らな行いと、絞め殺したものと、血とを避けるように、彼らに書き送るべきです。」**と、偶像に備えたものを食べてはいけないと言うが、だって、ただの食べ物でしょ。人間が食べるなら、それは、どっちにしても動物の殺傷なのだから、動物を痛みなく殺そうが、ヒーヒー泣き叫ぶ動物を、絞め殺そうと一緒に、生肉のまま、血をすすりながら食べても、何だよ、神が与えたもう命への尊敬がない？どっちでもいいよと考えていたかも知れない。

サマリア人は、そもそも、ユダヤ人も俺らのことが嫌いだが、こちとら、ユダヤ人が大嫌いさ。そんな彼らが。

ユダヤ人も罪人、フェニキアの私も罪人、サマリア人も罪人、いずれも、罪人と認め、私たちは、等しく、神の子キリストが十字架について死んで下さった、その贖いのゆえに、救われた、そのことこそ、われらの新たなアイデンティティー。生きる根拠だと。そのためなら、フェニキアの、サマリアのこだわりは捨てる。ユダヤ人も捨てる。異邦人も捨てるがユダヤ人も捨てる。ただ、この一点のゆえに。

主イエスの恵みによって救われていると信じているから。

それであります。今日の箇所、割愛しながらであります、その中心的につい

て、思いをめぐらしたことであります。

20世紀が終わり、2000年最初のクリスチャン新聞で、編集長の根田祥一師が、こんなことを言いました。「20世紀とはどんな時代だったのか」という題で・・・19世紀まで1900年の間、圧倒的にキリスト教は白人の宗教であった（1900年で白人81.1%）が、1980年には、非西欧諸国のクリスチャンがついに欧米を上回ったという記念すべき世紀になった。」と書きました。

終わりの時代に向けて、そして、2026年10月のこの週、教会は、フェニキア、サマリア、そして、ユダヤが、そして、西洋も東洋も、私たちが、ただ一点、**主イエスの恵みによって救われていることの素晴らしさ**をあらためて、思い起こし、その恵みに生きる者でありたいと願い、感謝と賛美のあゆみをいっそうしていくあゆみでありたいと願うのです。祈ります。